
sweet wonder rand ～ふたつのイタズラ～

夕輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

sweet wonderland 〈ふたつのイタズラ〉

【Nコード】

N2315P

【作者名】

夕輝

【あらすじ】

ある日の屋上から始まった物語。一つのお菓子のような曲によって小冬と道晴の運命は大きく変わってしまう。異世界へと潜り込んでしまう二人の運命は――！？

お菓子と煙草と愉快な男。

ランランランラーラン……ラランラン……♪

愉快的曲が聞こえる。確か小さい頃良く聞いた曲だった気がする。クラシックの割に曲調がお菓子みたいな、おもちゃみたいなそんな曲で、一回聴いただけで覚えてしまった。そんな記憶が微かに存在している。桐宮道晴はふとそう思った。

道晴の通う光栄高校はただ今休み時間中である。にも関わらず、道晴は日当たりの良い窓際の自分の席でそんな事に思いをはせていた。他にも、「ああ、今日の夕飯はなんだろう」とか「帰ったらなんの本読もう」とか、とにかくくだらないことを延々と考えていた。「そうだ、帰る途中でコンビニ寄って酔イカと濃いミルクティーを買っていこう」と道晴が思案していたら、ふいに声をかけられた。「ミチ、屋上行こう。3時限目サボろうよ。」

親友兼幼馴染の苺谷小冬だった。小冬は何か悪戯を考え出した時のような顔をしてそう誘った。

「フユ。なんだいきなり。」

「なに、嫌なの？オレの誘い断るの？」

「別に嫌とは言っとらんだろ。むしろ喜んで行くわ。」

「うわ、ツンデレ。そんなにオレ好き？ミチ。」

小冬は明らかにからかってそうけしかけたが、道晴はさらりとう返す。

「おお、好きだぞ。ゾッコンラブだ。」

それを小冬は「わ、ミチがオレンこと好きとか。ありえねー。」と笑って一蹴した。結局道晴は、口と言葉を武器とした舌戦で小冬に勝てた試しなど一回もないのだ。だが、コイツらはお互い自分以上にお互いのことを知りあう仲なのである。それもそうだ、この二人は生まれた時から一緒と言っても過言ではない。決してない。なぜか。それは二人の生まれた病院が一緒に分娩室が隣どうしで入院

部屋のベッドが隣どうしで究極母親どうしが仲良くなってしまったのだから、これはもうどうしようもない（ついでに家も近所さんだった）。死ぬまで一緒にいる運命なのだろう。そう二人はお互いに思っている。

「あー、まだ風が冷たいなあ。お日さまだけだったら大分あったかいのに。ねえ、ミチ」

二人は屋上でて、授業をサボって煙草を吸っていた。

「あー、そうだな…。そろそろ春だなあ…。」

俺は一番春が苦手だな。だって眠くなるんだもんよ。道晴の大敵は幼いころから睡魔と小冬だけである。

道晴と小冬は幼稚園から今までずっと一緒のところへ通い続けている。別に自分たちが望んだわけではなく、これまた母親たちが「やっぱり二人ともいっしょのところがいいわよねえー。」と言って勝手に決めたのだ。中学や高校はお互いに違うところへ行こうと思えば行けたのだが、母親から一カ月夕飯抜きを喰らうぐらいなら別にいいと妥協したのだ。

小さい時から道晴も小冬も、それはそれは聡く賢いお子であった。それ故に悪知恵もそれはそれは良く働いた。基本的に小柄でより悪知恵の働く小冬が頭脳役、同年の中では身長も大きく体格も良かった道晴が戦闘機役で、ガキにしては良く出来た悪戯を昔から死ぬほどやってきた。そして周囲には死ぬほど迷惑をかけてきたのだ。

桐宮道晴という人間は基本的に真面目な人間で、何事もきっちりやらないと気が済まないタチである。だから、小冬に言われた作戦は必ず自分の手で実行成功させたし（それを若干誇りに思っている）、悪戯のあとにも完璧に逃げおせた。もちろん成績優秀（小冬に「馬鹿という気はない。」と言われ、元から良かった頭を更に良くした。小冬といられなくなるのが嫌だったわけではなく、イラっとしてこまめに勉強していたらそうなったのだ）、運動神経抜群（元からの素質もあるが、大方は小冬に開発された）で、女子からの評価は高い。男子もこの変な男をなんだか評価している。普段は一人で

いることが多い道晴だが、別に友達がいらないわけではなく、好きで一緒にいないだけなのだ。それをスカズカと踏み入って蹴散らしていく奴は若干一名いるが。

女子からの評価が高い一因を担っているのが道晴のルックスである。

本人はさして気に留めていないようだが、正直レベルは凄く高いのだ。一八〇cmを軽く超える長身に見合った顔の輪郭、だが小顔で、その顔の中には均整のとれたパーツがちょうどよく散らばっている。そしてそこにスタイリッシュな黒ぶち眼鏡が存在している。さらに、その長身はまさにモデル体型と呼ぶにふさわしい体格であった。これらの素晴らしい素材を特に生かそうとしなくとも生かせている道晴は、そこに存在しているだけで目の保養になった。そして目の保養度が倍増するのは小冬と二人並んだ時である。

苺谷小冬はその性格から風貌まで道晴とは何もかもが正反対である。基本的に悪知恵が働き狡賢かった小冬は、何事も自分に被害が被らないように事を運ぶのがとてもうまかった。良く言えば「要領がいい」のだが、小冬の場合はただ単に自分が可愛すぎるから大事にしようってただけなのだ。だから頭がいいのは、「必要な個所だけ勉強」して解らないところは頭が良くなるよう育てた道晴に教えてもらっているからで、小冬自体は大して苦労していないのだ。運動神経がいいのはこれは生来のもらしい。そして自分の将来設計のために普段から人懐っこさを売りにしている小冬は友人関係が幅広く、道晴と違い一人でいることがほとんどない。にも関わらず、わざわざ一人でいることを好む道晴のところへ結局落ち着くのだ。こんな掴みどころのない男でも周りからの評価は高く、学校全体で人気者扱いなのである。

そして道晴同様その人気的一端を担っているのが、小冬のなんとも可愛らしい風貌である。

（こっちはそのことを自覚しまくって好き放題に利用しているが）身長は同年代の男子と比べいくばくか低く、一六五cmあるかない

かの小柄でこれまた小顔。そこに大きな瞳（色素が薄く、光にあたると黄金色に見える）と小さくスペースを取らない鼻と口。美少女、いや美少年の素質を余すことなく使い果たした見栄えなのだ。こいつ単体でも十分に目の保養になるのだが、やはり道晴と並ぶと保養度が半端ないらしい。

その二人が屋上で煙草をくゆらせていると、またあの曲が聴こえた。

ランランランラーラン……ラランラン……♪

「おいフユ、この曲なんだっけ？曲名が思い出せねんだよねー…」
道晴が何気なくそう尋ねた。

「…は？何にもきこえないんだケド」

「……………は？」

小冬にはこれが聴こえないというのか？そんなはずはない。だって自分はこのなにもはつきりと聴いているではないか。こんなにもはつきりと聴こえているではないか。

ランランランラーラン……ラランラン……♪

やはり聴こえる。ものすごくはつきりと聴こえる。

「ほらフユ。聴こえるだろ———？」

「え…きこえな……」

ランランランラーラン……ラランラン……♪

メロディーがうるさすぎてフユの声が聴こえない。

「ねえ…ちょ……………ミ……」

ランランランラーラン……ラランラン……♪

最早何もキコエナイ。

「ミチ……………ね……」

ランランランラーラン……ラランラン……♪

うるさい。

ランランランラーラン……ラランラン……♪

うるさ…

ランランランラーラン……ラランラン……♪

うる……

ランランランラーラン……ラランラン……♪

「うるっせえ—————?」

ついに我慢しきれなくなった道晴が怒鳴ると、
ポンッ!

「は?」

二つ分重なったその声の先にはなんと。

「はー、やっと返事してくれたなミチハル。長かったー…」

奇妙奇天烈、摩訶不思議、独創的にして難解な格好をした派手な男が一人立っていた。しかもその男は自分の名を呼んだ。「ミチハル」と、確かに呼んだのだ。

信じ難いことが今日の前で起きた。

「…ミチ、これはタチの悪い夢かなあ」

沈黙を破ったのは小冬だった。

「…同じ夢とか見るかフツ」

ごもつともである。

「じゃあ、何、これは現実だって言うの?こんなんが…」

これもごもつともである。

「そうそう、現実」

男が言った。

「俺の名前はね、香宮。香りに宮と書くんだよ。そのまんま呼んでね。俺はね、ミチハルに会いに来たんだよ」

屋上に、一筋の風が吹いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2315p/>

sweet wonder rand ～ふたつのイタズラ～

2010年12月1日06時24分発行